

Size and bridging of the sella turcica in Japanese orthodontic patients with tooth agenesis

佐藤 大介

論文内容の要旨

トルコ鞍の大きさと架橋は顎顔面領域の異常や上顎側切歯と下顎第二小臼歯の先天性欠如と関連があると報告されている。トルコ鞍の架橋と歯の先天性欠如の発現頻度と発現パターンは人種間や民族間で異なる。日本人において、トルコ鞍の大きさ・架橋と歯の先天性欠如のパターンの関連性を検討した報告はない。従来、歯の先天性欠如は14歳以降に診断する。トルコ鞍の大きさ・架橋と歯の先天性欠如のパターンの関連性は、14歳未満での歯の先天性欠如の早期診断を可能にする。本研究の目的は、トルコ鞍の大きさ・架橋と歯の先天性欠如のパターンの関連性を解明し、トルコ鞍の大きさ・架橋が14歳未満の歯の先天性欠如を予測する指標となる可能性を検討することである。対象は、日本歯科大学新潟病院小児・矯正歯科に来院した上顎第二小臼歯が先天性欠如している32名(1群)、下顎第二小臼歯が先天性欠如している32名(2群)、5歯以上の先天性欠如がある32名(3群)および歯の先天性欠如がない32名(4群)である。さらに1~4群をそれぞれ16名ずつ14歳未満の患者(1A群~4A群)と14歳以上の患者(1B群~4B群)に分け、1A群~4A群をA群、1B群~4B群をB群とした。資料は側面頭部エックス線規格写真であり、トルコ鞍の大きさを評価するために距離計測5項目と面積計測1項目を計測し、さらにトルコ鞍架橋の程度を分類した。そして、以下の結果を得た。

1. 床突起間距離は、1群と3群が4群より、3群が2群より有意に短かった。
2. トルコ鞍の深さ、直径、面積および周長はB群がA群より有意に大きかった。
3. トルコ鞍架橋の頻度は、3A群が4A群より、1B群と3B群が4B群より有意に高かった。

以上より、上顎第二小臼歯の先天性欠如と5歯以上の先天性欠如では、年齢に関わらず床突起間距離が短く、さらに5歯以上の先天性欠如ではトルコ鞍架橋の頻度も高いことが明らかとなり、床突起間距離とトルコ鞍架橋の頻度は14歳未満で歯の先天性欠如を予測する指標となる可能性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本人矯正歯科患者においてトルコ鞍の大きさ・架橋と歯の先天性欠如の関連について検討したものである。その結果、上顎第二小臼歯の先天性欠如と5歯以上の先天性欠如では、年齢に関わらず床突起間距離が短く、さらに5歯以上の先天性欠如ではトルコ鞍架橋の頻度も高いことを明らかにし、床突起間距離とトルコ鞍架橋の頻度は14歳未満で歯の先天性欠如を予測する指標となる可能性が示唆された。これらの知見は、矯正歯科治療の診察・診断と治療成果の向上の一助となる貴重な知見であり、歯学に寄与するところが多く、博士(歯学)の学位に値するものと審査する。

主 査 小 椋 一 朗
副 査 影 山 幾 男
副 査 葛 城 啓 彰

最終試験の結果の要旨

佐藤 大介に対する最終試験は、主査小椋 一朗教授、副査影山 幾男教授、副査葛城 啓彰教授によって、主論文に関する事項を中心として口頭試問が行われ、優秀な成績をもって合格した。